

「赤い羽根 新型コロナ感染下の福祉活動応援 全国キャンペーン」助成一覧(11月末)

1	中之条町手をつなぐ育成会（中之条町）		
【事業名】ICTを活用した情報発信とアート作品のデジタルアーカイブ化			
【事業内容】 知的障害者のアート活動「なかんじょアートミーティング」は県内各地からの参加もある余暇活動で、中之条ビエンナーレにも出展してきましたが、コロナ禍で活動を一時休止、再開後も見学交流や作品展開催の目途は立ちません。また平成30年に作成した「手をつなぐあんしんノート吾妻」の普及活動もできない状況です。 ①会のホームページ開設、作品をデジタルアーカイブ化し仮想美術館を設けて展示。作品公開によりアール・ブリュットの理解促進。 中之条ビエンナーレ出品者として移住したアーティストに委託。 ②あんしんノートとそのFAQをホームページに掲載。		助成金額	300,000円(申請どおり)
		【助成理由】 単にデジタル化を図るだけでなく、地域住民(移住アーティスト)との協働により知的障害への理解が単に障害特性にとどまらず、個に着目した可能性への期待につながると考えます。コロナ禍で進むICT化を支援すべく助成します。	
2	前口よいとこ会（草津町）		
【事業名】地域生活支援のための現状調査、研修			
【事業内容】 商店も病院もない交通の不便な当地区は、コロナ禍以前から高齢化による生活課題が山積でした。このコロナ禍でサロンが休止となり、通院や買い物を控えるなど独居高齢者の閉じこもりが課題です。 地域の有志が集まり、継続的な支援のしくみをつくるために、困りごとの把握をし、実践へとつなげていきます。 ①感染対策しながら困りごとの聞き取り調査を実施。 ②現段階で想定される困りごと（サロン再開と移動手段確保、通院・買物支援、草刈、雪かき）の解決に向けた担い手発掘・育成		助成金額	150,000円(申請どおり)
		【助成理由】 生活支援体制整備事業・第二層協議体の、住民の自主的な支え合い活動。このコロナ禍で困りごとに直面した住民が感染症に臆することなく積極的に取り組もうと動き出すのを後押しすることは、今まさに必要な助成であると考えます。	
3	こまがたつくし（前橋市）		
【事業名】感染拡大により増加する経済的困窮家庭のこども支援			
【事業内容】 ひとり親世帯等経済的に困窮している家庭が、このコロナ禍でますます厳しい状況となっています。当地区も例外ではありません。 コロナ禍直前に開始した子ども食堂ですが、テイクアウトに切り替えて月2回実施しています。弁当ができるまでの間、子どもたちは庭で遊ぶなど、居場所にもなっています。 テイクアウト用容器代がかさみ、継続のために助成金が必要です。 (利用者数1回平均15名×月2回×10か月)		助成金額	300,000円(申請どおり)
		【助成理由】 コロナ禍での子ども食堂の役割として、単に弁当を配布するのみならず、居場所としても機能しています。緊急事態宣言以降の子どもたちの環境の変化を考えると、地域の人たちが見守る安心の居場所は今後も必要なものと考えます。	

4	東毛ボランティアグループのぞみ会（太田市）	
【事業名】 生活困窮家庭の子の食支援(子ども食堂)をテイクアウトに変更して継続		
【事業内容】 生活困窮家庭の子を支援するために、昨年10月から毎週土曜日に子ども食堂を開いていました。コロナ禍で4～7月は休止しましたが、8月からテイクアウトに切り替えて再開しました。1回平均20食を無料で提供していますが、容器代等もかさみ、運営が厳しくなってきました。行政からの子ども食堂の補助金は精算制なので、会として経費を立て替えるのですが、今般のコロナ禍で事業収入が減り、立替財源も厳しい状況です。生活困窮家庭の子の食支援は“待ったなし”ですので、そのような中でも継続していきます。	助成金額	300,000円(申請どおり)
	【助成理由】 テイクアウトを利用する子どもが「うちは生活が苦しい」と直接言葉にする場面も増えてきたとのこと。コロナ禍で、今まで以上に困窮している家庭も多いと推測されます。コロナ以前から困窮家庭の子ども食堂を実施してきた当団体だからこそ、今後も続けてほしいと願います。	

5	ワーカーズコレクティブなにも（前橋市）	
【事業名】 高齢者の心に寄り添った見守りを兼ねたお弁当の配達		
【事業内容】 コミュニティカフェ「カフェなにも」に来店していた高齢者も、コロナ禍で外出を控えるようになり、生活の質の低下が懸念されます。弁当配達等で高齢者を見守り、社会との接点をつくっていきます。 ①手作り弁当の配達（12月～3月まで週1回）。弁当箱は回収形式にしてコミュニケーションをとるようにし、信頼関係を築く。 ②おむすびカフェを月1回、カフェ定休日の日曜日に開催。 ③カフェ来店者には、少なからず、認知機能の低下が懸念される方や障害のある方などが来店されるため、スタッフ研修を実施し、地域の人たちがホッとできる場となることを目指す。	助成金額	300,000円(申請どおり)
	【助成理由】 地域に開かれた居場所「まちの縁側」を目指す活動の一環として、弁当配達を困りごとへのアウトリーチと捉えて取り組むことは大変重要と考えます。居場所に参加する人の課題に沿うべく、スタッフ研修を行うことも大切な取り組みです。	

6	まなびバ！シリウス（館林市）	
【事業名】 オンライン・フリースクールとオンライン相談事業		
【事業内容】 不登校状態にある子どもたちにとって、学びの場や交流の場はまだまだ選択肢が少ないのが現状です。また、今般のコロナ禍で人が集まる場所に行きにくく、親子で孤立しがちです。孤立防止のためのサポートのしくみをオンラインを活用してつくっていきます。 ①オンライン・フリースクール開設 学びのサポート時間と交流のプログラムを週1回実施 ②日常的なオンライン交流の場 ①を補うべく、子どもたちがファシリテーターや仲間とチャット交流できる場を運営 ③保護者のオンラインの集いを月1回開催	助成金額	300,000円(申請どおり)
	【助成理由】 学びや交流の選択肢は、不登校児に限らず、コロナ禍を経て今後ますます多様化が求められてくると思われます。不登校であってもなくても、子どもたちが互いに尊重し合いながらコミュニケーションをとれるよう、さまざまなしくみの試行に期待して助成します。	

7	かがや幸せのベンチプロジェクト実行委員会（前橋市）	
【事業名】 幸せのベンチプロジェクト（高齢者等地域住民の、密を避けた交流の場）		
【事業内容】 コロナ禍でいきいきサロンが相次いで休止となる中、高齢者の運動や交流の機会が減り、健康不安の相談が地域包括支援センターに寄せられるようになりました。高齢者の密を避けた交流の場が必要です。 ①地域内に視認性の高い「黄色いベンチ」を多数設置し、高齢者が移動する際の中継地点となる場所をつくる。休憩地点があるという安心感のもとに高齢者に外出を促す。 ②高齢者のみならず、地域住民が集うよう工夫する。ベンチにQRコードを記載し、近隣のお店の情報や音楽が流れる仕掛けや、ベンチを目印としたスタンプラリー等も検討している。 ③ベンチの設置・色塗りの段階から、住民や学生、地元企業等に関わってもらい、交流の場としての「みんなのベンチ」と意識してもらう。	助成金額	300,000円(申請どおり)
		【助成理由】 当地区の地域包括支援センターや自治会、公民館、地区社協、福祉事業者や企業など、多様な人たちが参画して実施される企画。コロナ禍を「みんなで乗り越える」意気込みと仕掛けは、コロナ後をも見据えた地域づくりのモデルとなると考え、助成します。

8	特定非営利活動法人 Next Generation（前橋市）	
【事業名】 ひとり親家庭の児童生徒へのオンライン学習支援		
【事業内容】 2018年から続けているひとり親家庭の児童への学習支援を、今般のコロナ禍で、集団形式から個別支援に切り替えました。1対1の支援は学習のみならず、児童とのコミュニケーションの充実にもつながり、寄り添い型支援として定着しつつあります。一方で、集団の中での成長が希薄になり、特に自己肯定感の低い児童には集団でのコミュニケーションが必要だと感じています。 今般の感染症流行状況に鑑み、オンラインでの交流事業を企画します。オンラインの環境が整っていない家庭向けにタブレット等の貸し出しも行いフォローします。 また、さらに流行拡大した場合は、個別支援をもオンラインに切り替えて、支援を継続していきます。	助成金額	300,000円(申請どおり)
		【助成理由】 コロナ禍で、オンライン学習の必要性への理解は各家庭に広まりつつあると思います。オン・オフのメリデメを上手に補い合いながら企画されており、また家庭のオンライン環境への配慮もされ、今までの学習支援でのノウハウ蓄積と信頼関係構築が活かされる事業だと考えます。

9	子どもワクワク食堂実行委員会（安中市）	
【事業名】 だれもひとりぼっちにしない！プロジェクト(食料・お弁当配達、ワクワクハウス)		
【事業内容】 コロナ禍以前から、月1回の子ども食堂を実施してきました。今般のコロナ禍で生活困難家庭が目に見えて増えてきて、食料支援も継続して行っています。スクールソーシャルワーカーや他の子ども支援団体との連携も進めていますが、残念ながら虐待や無理心中など深刻な事件も地元で起きています。 7月に子育て親子の居場所としてワクワクハウスをオープンしました。そこに子育て応援のシンボルとなるような「みんなのポスト」を設置し、子育て世代に優しいまちになるように多様な声を集め、多様な集まりをつくっていききたいと考えています。 コロナ禍の今も、子ども食堂や食料支援、居場所活動を続け、密を避けながらできる交流事業を企画実施していきます。	助成金額	300,000円(申請どおり)
		【助成理由】 単に食事・食料提供に留まらず、常設の居場所も開設し、また虐待等社会課題にも具体的にアプローチする試みをなさろうとしています。虐待＝専門職、でなく、近隣住民の関心を集めていっしょに考えていこうとする姿勢は、民間のボランティアな活動ならではと思います。

※11月27日現在、申請10件のうち1件は審査継続中で、この表には入っておりません。